

大学は今・・・― FD 活動と教員評価―

服飾美術学科 高岸 徹

各大学の教員評価はおおむね 4 つの評価を柱にしている。すなわち、1) 教育・学生指導に係わる事項、2) 研究に係わる事項、3) 地域・社会・学協会活動に係わる事項、4) 大学の管理運営への参画に係わる事項である。大学教員は教育・研究は当然のこと、大学組織の一員としての任務遂行、さらには社会に対しての貢献等がこれから強く要請される時代に入ったと言えよう。このような観点から、教員評価システムの導入は避けて通れないようになるだろう。

最近出版された興味ある本を紹介する [2]。一読をお薦めする。

[1] 西沢宗英、大学時報、p.30、5 月 (2005)

[2] 石浦章一、東大教授の通信簿―「授業評価」から見てきた東京大学、平凡社新書 (2005)

FD フォーラム報告

教職教養科 森山 茂樹

②時代は、文字文化からヴィジュアル文化へと変容しており、学生の学習環境も、この大きな変化の影響下にあること。

③したがってビジュアルリテラシー (絵・図・表・写真・ビデオ映像などを読み解き、発信する能力) が、教員にも学生にも求められていること。

④文字の世界で育った教員文化と、ヴィジュアル世代の学生文化との間には大きな隔絶があり、大学教員にはこれを意識的に埋める努力が要請されていること。

このような背景のもとに、授業改善が緊急の課題である、ということでした。

国公立大学において法人化がスタートし、親方日の丸の世界から、各大学は独自の方策を模索し、生き残りをかけて必死の努力を始めた。その一つとして、教員評価システムが活発に動きだしている。

日本私立大学連盟「教員評価委員会」は、「教員評価のあり方―教員評価システムの構築に向けて―」と題する報告書をまとめた [1]。よく企業は人と言われるが、大学における教員の位置付けも企業と同じであろう。教員の質―即大学の質にもつながる。同報告書では、個々の教員の努力に応じた教育・研究支援体制の充実が重要であり、これに教員の評価結果を反映させることが教員評価の意義であると述べている。

今年 3 月に開かれた、大学コンソーシアム京都主催、第 10 回 FD フォーラム「評価される大学教育」に出席した時の報告です。私が参加したのは、第 7 分科会「授業改善―新しい時代における授業のあり方を探る」でした。

分科会では、大学での授業改善が必要とされる時代的な背景として、次の四つが報告されました。

①大学の大衆化による、大学生の学力の低下・意欲の無さ。このことから大学は研究の場から教育の場へと、必然的に軸足を動かさなければならないということ。

FD ニューズレター No. 1

2006 年 1 月発行

編集：東京家政大学 FD 委員会準備室

発行：東京家政大学

東京都板橋区加賀 1－18－1 〒173－8602

<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/>

FD NEWS LETTER No.1

Faculty Development

ごあいさつ

学長 片岡 輝

Faculty Development は、大学の構成員である教員が、自らの所属する大学の教育とは何か、その中で自分に何ができるのか、という根源的な問いに向き合うことから始まります。研究の場であると同時に教育の場である大学に在って、研究の対象とどう向き合い、学生とどう向き合うべきかを、研究と教育との往還の中で不断に問い続け、その省察に基づいて行動すること。FD の真髄はこのことに尽きます。学生による授業評価、公開授業によるピアレビュー、授業方法の改善研究、といったいわゆる

FD 活動は、そのための手段にしか過ぎません。授業評価のデータや公開授業での講評を手がかりに、主体的に授業の改善に取り組んでいただきたいと思います。

幸い、本学の教育に対する学生の満足度は、高い順位にあります。しかし、個々の授業に対しては、学生からさまざまな要望やクレームが寄せられています。自己中心的、権威主義的な殻に閉じこもることなく、心を開いて良きファシリテーターとして真摯に学生に対応していただくために、FD 活動に積極的にご参加いただくようお願い申し上げます。

FD 活動の取り組み

FD 委員会準備室 室長 稲垣 洋輔

学校教育法の改正により平成 16 年度からすべての大学は 7 年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関 (認証評価機関) の実施する評価を受けることが義務付けられ、本学も平成 16 年度大学基準協会へ加盟判定審査を申請し認証評価を受け、大学基準に適合していると認定されました。しかし教育内容・方法の項目の中で「授業評価などを含めて、FD の整備検討が遅れているので改善が望まれる」と助言を受けている。また短期大学基準協会が実施する第三者評価を受けるに当たり、自己点検・評価報告書の項目にもある「FD 活動の整備」を実施しておかなくてはならない。本学では平成 16 年 4 月より FD 委員会準備室がスタートし、FD とは「全教職員の組織的教育改善活動」と広義に捉え、FD 委

員会の任務として、

1) 教育改善に関する情報の学内への提供
2) 教育改善のための調査と分析
3) 教育活動を支援する体制の整備に関する審議と提案であると考えます。換言すれば、FD の目的は「授業の現場が輝いており、大学として誇るべきものがあり、大学に帰属していることの喜び・誇りを学生にもたらすような環境を作る」ことである。

平成 17 年 4 月より Minute Paper による授業評価システムを導入し、データの収集と分析を行い、本格的な授業評価アンケートの実施案を検討している。また本年 7 月には教員向け FD アンケートを実施し、教育環境等の調査を行った。その中の項目で、「他の教員の授業見学をする」、「自分の授業を公開してもよい」と多くの教員が回答したことは、今後の授業改善に大いに役立つことと思われる。

前期にミニッツペーパーを利用してみて（報告1）

心理教育学科 福井 至

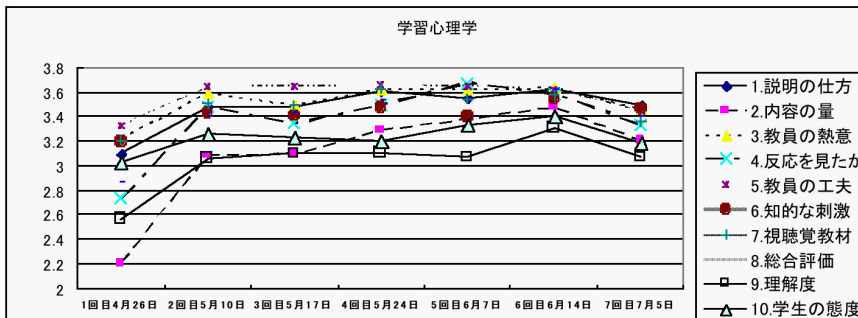
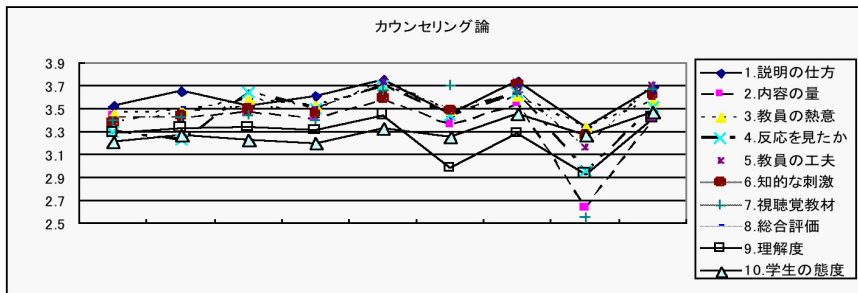
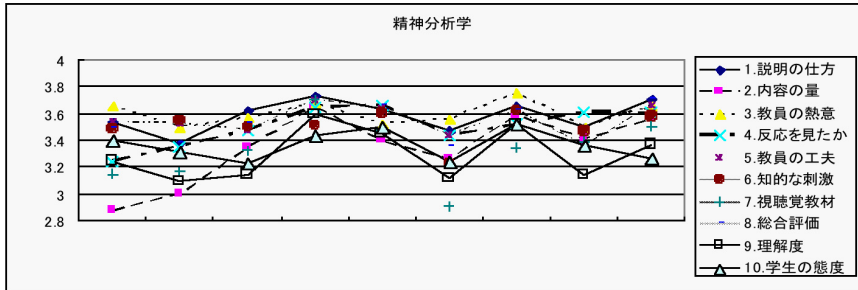
ミニッツペーパーを取り忘れた授業時間もあったが、半数強の授業でミニッツペーパーを実施した。実施しなかった回もあるため、図中のY軸ラベル何回目〇月〇日の回数部分は実際の授業回数と一致しない部分がある。授業では、精神分析学と学習心理学は教科書を用い教科書にそって説明した。また、カウンセリング論では教員作成の資料を配付して授業をおこなった。

ミニッツペーパーを利用してまず分かったことは、裏面の授業の感想や質問を書く欄を見ると、学生の理解できなかった部分がすぐに分かり次回の授業で補足の説明ができることであった。また、感想欄からもっとゆっくりと話してほしい、視聴覚教材(パワーポイント)と同一の印刷教材を配布してほしいという希望が多いことがわかった。そのため、ゆっくりと話すようにし、教科書の内容のまとめたパワーポイントであってもそれを配布するように改善したところ、授業評価が格段にアップした。まじめな学生が多いため、パワーポイントをノートに取りきれない場合には非常に心配になると考えられる。教員としては、ノートをとるこ

とに集中するのではなく、授業中にもっと頭を働かせて内容を理解するようにしてもらいたいと考え、さらに授業方法を改善した。つまり、授業中に双方向の授業を行うことを目指し、間違ってもあまり気にならないような雰囲気を作っておいて学生への発問を多くした。その結果、学生の反応を見たかという項目で、さらに評価がアップした。

ところで、精神分析学の6回目6月13日のように配布しなかった視聴覚教材を補足説明に用いた場合には、教員の熱意は感じながらも、やはり心配なのか理解度や総合評価が低下し、それらの資料も配付してほしいという希望が出た。さらに、カウンセリング論の8回目7月5日のように、授業内容を教員側でもいっばいっばいに増やした回は、教員側としてはできるだけ多く教えたいとの熱意がありながらも、学生にはそれが伝わらずすべての評価が低下することが示された。やはり学生の理解を考えて、授業内容を精選することが重要なのであろう。

以上のように、ミニッツペーパーを利用してみると、自然と自らの授業改善ができていくことがわかった。

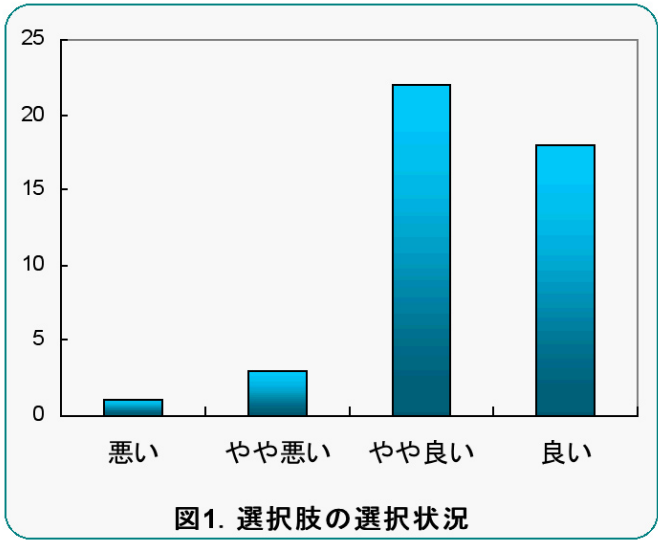


前期にミニッツペーパーを利用してみて（報告2）

教養部 井上 俊哉

選択肢の選ばれ方を棒グラフに

授業をしていて、学生の理解度が気になることが多い。理解不足ならば、さらに説明を加えたい。十分に理解できているならば、すみやかに次のテーマにうつりたい。だが、学生の「顔色」からは判断しかねる…。こんなとき、ミニッツペーパーが役に立つ。項目ごとに選択肢(1, 悪い, 2. やや悪い, 3. やや良い, 4. 良い)の選ばれ方を眺めるだけでも参考になる。図1は、「授業内容の量・難易度・進行速度は適切でしたか」という項目への選択状況を示したものである(今回紹介するのは、すべてパソコン基礎Iの授業に関するものである)。



項目の平均をレーダーチャートに

本学のミニッツペーパーは10項目からなるが、これら全10項目への回答傾向を一覧するために、各項目の平均をレーダーチャートで表してみた(図2)。これを見ると、

「説明の仕方は適切でしたか」
「今日の授業はよく理解できましたか」
などの項目では満点に近い評価を得ている一方で、
「授業内容の量・難易度・進行速度は適切でしたか」
「教員は学生の興味を引くための工夫をしましたか」
「授業に知的な刺激を受けましたか」

などの項目では平均が3点をやや超える程度であることがわかる。基礎的な授業であるため、一部の学生は退屈をしていたのかもしれない。相関の分析 評定データを因子分析という手法で分析したところ、「理解」および「興味」に関係すると思われる各3項目が特定された(表1)。そこで、各3項目の合計点を「理解」得点、「興味」得点として分析を進めた。受講者(約160名)の平均を調べると、「理解」得点に関しては12点満点の11.3点と高い一方で、「興味」得点については12点満点の9.8点であった。パソコン基礎Iの授業は、受講者の理解度は高く保たれているが、興味深さという点では改善の余地があるかもしれない。さらに、「今日の授業を総合評価してください」という項目の得点を「総合評価」得点として、「理解」「興味」との相関を調べた(表2)。「理解」と「興味」の相関は0.21と低く、「わかる」ことが「興味深さ」と結びついていないことがうかがえ

た(科目の性質によっては、この関係は変わる)。また、「総合評価」は「興味」との相関が高く(0.56)、パソコン基礎Iの「総合評価」を上げるためには、「興味」を引く授業にすることが目標となりそうである。

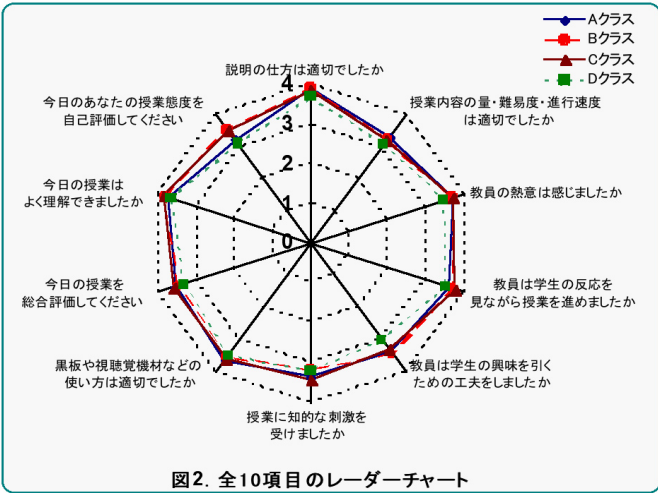


表1. ミニッツペーパーの因子分析		
理解		
・今日の授業はよく理解できましたか。		
・説明の仕方は適切でしたか。		
・教員は学生の反応を見ながら授業を進めましたか。		
興味		
・教員は学生の興味を引くための工夫をしましたか。		
・授業に知的な刺激を受けましたか。		
・授業内容の量・難易度・進行速度は適切でしたか。		

表2. 「理解」「興味」「総合評価」間の相関			
	理解	興味	総合評価
理解			
興味	0.21		
総合評価	0.43	0.56	